
始まりの終わりの始まり

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりの終わりの始まり

【Zコード】

Z83240

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

あの昔の恋を飲み込んだまま、同じ場所を旅行する春人。
昔と同じ風景、変わった風景、それをあの時とは違う人と体験する。

そんなときに何を思うのか？

～1～（前書き）

少し前に本気で書いた小説です。

雜踏の中に、響きわたる声。

「5」

「4」

立ちすくむ身体。

「3」

のどの奥がヒコヒツする。乾いて、ねばついて、言いたい一言がない。

「2」

まっすぐと見つめるその眼には、不思議な力がある。

「1」

目を離すこともできず、ゆっくりと動く口元だけを見つめていた。

「0、タイムオーバー」

それが、最後の記憶となつた。

それからとこりもの、その記憶がつみあがることはなかつた。

なびく髪、迷いのない歩き方、手を伸ばしても何もつかめない。

それは、その瞬間から終わり、そして始まつたのだった。

「えつとねえ、じゃあねえ…タイ、タイに行つてみたい。」

白い壁にアンディウォールホールの絵が飾つてあるおしゃれなカフェで、大沢かすみは笑顔で言った。

道路に面した壁は一面ガラス張りで、一客何十万もする椅子が飾つてあるこのカフェは、インテリアだけではなく、しつかりとした料理も出すということで若いカップルだけではなく、少し年配の夫婦なども足しげく通う。

その中のメニューの中に、期間限定でのトムヤムクンがあった。

それを箸でつつきながら、かすみはタイを思いついたのだった。

「タイ…タイか…」

と、言葉に詰まりながら、吉田春人は答えた。そして、気まずい気持ちがかすみに伝わらないよう、ごまかすかのように薄く茶色に染めた坊主頭をカリカリいた。

春人とかすみは、交際を始めて1年になる。

春人は市内のイタリアンレストランの厨房で働いている。オープン

キッチンの小さな店で、カウンターしかない店内では、料理の腕と同様に接客も大切な要素の一つとなる。

その店に、かすみは同僚の女人とやつてきた。

かすみは、医療系の事務をやつている。9時に勤務し、5時の定時に仕事を終わらせるのが毎日の目標だった。毎日毎日、目まぐるしく降つてくる仕事を、いかに効率よく終わらせるか考え、アフター5には同僚と一緒に食事に出かける。

そうして、食べ歩きに出かけるのが小さな趣味としていた。

ある日入ったイタリアンレストランで、春人の作るカルボナーラの味に惚れ込んだかすみは、店に通いつめ、いつしか店の外でも会つようになつた。

そんなんてことのない日常の中のひとコマだった。

「やつ、タイ！料理もおいしそうだし、物価も安いっていつから？」
年末年始は、お店も休みでしょ？」

「まあ、オーナーが里帰りするからね。29から、3日まで休みになつてるけど・・・」

「じゃあ、年末年始に行けるよね？春人は、海外旅行には行ったことあるのかな？」

「…あ、ああ。一応、料理人はしぐれだから、いろんな国食べ歩きに行つてはいるんだ。」

春人の口調は老けじれないのである。

「やっぱりプロの料理人は違うのね、なんだかかっこいいな。」

「いや、でも、今まで韓国とタイとイタリアにしか行ってないから、えらそうなことは言えないんだけどね。」

「それだけ言つてれば十分じゃない? タイにも行つたことがあるんだ! なら安心だね。何歳くらいの時に行つたの?」

かすみは春人がタイに行つたことがあるということをちょっと興奮しているようだった。その反面、春人は返答に困っていた。

「イタリアには、18の時、高校卒業してから行つたんだ。そのあと、23の時、韓国に一人でふらつと食べ歩きで行つたかな?」

「なるほど、韓国も料理おいしそうだもんね。タイにはいつ行つたの?」

「うん・・・2年くらい前かな?」

「ねえねえ、やっぱりタイの料理つて美味しい?」

「うーん、けど、クセがあるから、好き嫌いは分かれちゃうと思うよ。日本で食べるそのトムヤムクンみたいなタイ料理は、日本人向けにしてあるからさ」

春人は、指でかすみの前にあるお椀をさして言つた。トムヤムクンは、白いおしゃれなお椀に入つており、なんだかタイ料理には見えなかつた。

「そりなんだ、タイには独りで行つたの？」

「何氣ない一言に、春人の顔が曇つた。

「あ、ああ。もちろん独りで行つたよ」

春人の表情に気づいたのか、かすみは追い打ちをかけた。

「本当？」彼女と行つたんじゃないの？」

「そんのはいないさ。料理の研究をしに行つたんだよ」

「うへん・・・」

かすみは、上目づかいに春人を見る。

「しかたないなあ、信じてあげる！春人さんは、嘘をつけるほど器用な人じやなさそうだもんね」

「そりかなあ、器用な方だとは思つてゐるだけど・・・ま、信じてもらえたならいいや」

少しほつとした表情で、春人は自分の前にあるタコライスに取り掛かつた。

「じゃあ、タイに決定ね。私が、旅行会社に飛行機の予約を入れるね。だから、向こうに行つてからは、春人さんに行く場所とか決めてもうつていいかしら？」

「あ、ああ。いいよ。あんまり遺跡とかには行かなかつたんだけど、いいかな？」

「うん。私はおいしいものを食べられれば、それで幸せだから

スムーズに流れる会話、スムーズな言葉のキャッチボール、春人はかすみと一緒にいることで、確かに安らぎと心地よさを感じる。それは確かだつた。

ただ、タイに行くとなると話は別だつた。

あの時、つかめなかつた手。なびく髪、そしてもう一度と振り返らなかつた。その顔は思い出そうとしてもショットモヤがかかつたようになつてしまつ。

あんなに夢中になつたはずだったのに。現実と夢のはざまで置いてしまつた感情があの国には詰まつてしまつた。

そんな中に、かすみと一緒に行く？はたして自分は耐えられるのだろうか。そして、かすみを傷つけてはしまわないだろうか？

そんな想いとともに、タコライスをかきこみ、ビールで流し込んだ。

「新千歳空港行きは3番線のホームより発車になります。なお、今日は大雪につき5分ほど遅れて運行していることをお詫び申し上げます」

春人は、小さなスーツケースを引きずりながらその放送を聞いた。タクシーから、駅に入るまでの少しの間で、頭にはもう雪がつもつてしまつ。このまま、飛行機が飛ばなければいいのにな、と春人は心の中でつぶやいた。

早朝の札幌駅には、多くのスーツケースを持った人であふれていた。年末年始の旅行は、今日12月29日からスタートするからだろう。せっかくの旅行が雪で邪魔されではたまらない、と駅員に詰め寄っている人もいた。

切符を買い、待ち合せの改札に向かつ。

「ゴロゴロゴロ、スーツケースの音が、雷鳴の音のように聞こえる。

恋人と行く海外旅行、心は晴れ渡つて当然なのだが、春人の心には暗雲たちこめていた。

「春人、遅い！すつごい待つた！」

「そんなこと言つたつて、時間通りだよ」

「私は、15分前に来たの！楽しみにしてたんだから、そんなの当

たり前じゃない。時間どおりに来るなんて、愛が足りないわ。『めんなさいは？』

「いやはや、理不尽だな。わかつたよ、『めん、『めんよ』

「しつかたないな。許してあげよ。あとで、マックおひつてね

「春人さん、おはよう

かすみの声で春人は我に返つた。

「すごい雪だつたね。タクシーで来たの？」

かすみは、ベージュのコートを着て、大きなスーツケースを傍らに置いていた。その上に、大きめのボストンバッグが置かれていた。

「あ、ああ。タクシーも遅れるかと思ったよ。すごい荷物だね」

「うん、初めての海外旅行だから何を持つていいかわからなくて・・・やつぱり多かったかな？」

「いや、別に大丈夫だよ。じゃあ、遅れてるらしいけど、ホームまで行つちゃおうか」

と言いながら、春人はかすみの持つボストンバッグを持とつとした。

「あっ、いいよ。自分のバックだから自分でもたなきや

「いって、スーツケースも大きいんだから、気にしないでいいよ

春人はそう言いながら、無理やりボストンバッグを持つて歩きだした。

「ありがとう、春人さんって優しいのね。そういうのって、女人にモテると思うよ」

「そりがとう？普通だと思つけど」

「そうやつて、さらりと言えるのがモテる人なのよ。鼻が高いな。タイでニューハーフの人にモテて、浮氣しちゃだめよ」

かすみは笑つてそう言つた。

春人は思い返す。あの日、遅いと怒鳴られて、持つていたカバンを投げつけられたのを。あいつは、たくさんの荷物なんて持つてなかつた。

「どうせ、向こうにもいろいろ売つてるわよ。大丈夫、国が違つたつて同じ人間なんだから。なんとかなるつてーさ、カバン頼むね。私の全財産、春人に任せるとか」

無邪気な笑顔で語る彼女の姿がどうしてもちらついてしまつ。

ぽんやりしている春人に、かすみは声をかけた。

「春人さん、大丈夫？昨日も遅かつたんじゃないの？実は具合悪かつたりしない？」

「いや、大丈夫。ちょっと考え方をしてたんだ。さ、行こうか。そろそろ列車も来るだろうし」

「うん、いや～楽しみだな～。タイに行つたら、何を食べようかな～？ガイドブック、何冊か買つてきたから、一緒に勉強しようね」

ホームに向かうかすみの姿を見ながら、春人はやつぱりやめておけばよかつたかな、と思っていた。

行き当たりばつたりな旅をしたあの時と比べ、今回の旅はあまりにも違いそうだ。

「ロロロロロ…」スーツケースの音がさつきより大きくなつたように、春人には感じていた。

溜息をかすみに気づかれないようにして、春人は顔をあげた。楽しむんだ、恋人との旅行を！自分に言い聞かすように春人はかすみに声をかけた。

「本当に、楽しみだね！」

春人とかすみがスワンナプーム国際空港に到着したのは、もうかれこれ3時間ほど前だつた。

大雪で飛ぶかどうか心配された新千歳から成田へとび、乗り換える後タイに向かう。

成田から、タイまではおよそ7時間半ほどである。

年末年始といふことで、飛行機は満員で家族連れも多い。

7時間半の長旅は春人にもかすみにも辛いものとなつていて。飛行機の中では、日本ではレンタルもされていないような最新の映画もあつたが、満員の機内では集中することもできず、深い眠りなどにもつけるわけがない。

特にかすみの横に座つていた中年の男のいびきがひどく、辟易して春人はわざと大きな音を出し、起こすこともあつた。

言葉が少なくなつたかすみはいろいろと世話を焼いてやつたのだった。

空港についてから、現地のツアコンを探す。とにかく人、人、人の渦にのまれ、押し出されながらやつとのことで見つけ、バスに乗り込み、説明を受けて、へとへとになりながらなんとかホテルにたどり着いたのだった。

大きなスーツケースをベッドの横に置き、春人はかすみに声をかけ

た。

「大丈夫？結構時間かかったよね。具合とか悪くない？」

「うん・・・ちょっと人に酔つちゃった・・・」

「年末年始だからねえ・・・前の時はこんなひどい人ごみではなかつたんだけどね。」

ベッドに腰をかけて靴を脱ぎながらかすみが答える。

「そういえば、前の時はいつ頃来たの？」

「今と同じ乾期の冬だったよ。でも、今回みたいに年末年始じやなくて、休みが明けた時期を狙つていつたんだ。あの頃は、まだ店もそんなに忙しくなくて、オーナーに修行だと言つたら連休をくれます。」

「そうなんだ。いろいろと食べ歩いたりしたんでしょ？」

「うん、まあね。でも、さつきのガイドブックにもあつたけど、屋台の食べ物とかはあんまり積極的に食べない方がいいかな？前の時も、ちょっとお腹下しちゃつたんだよね。」

「タイの料理つきつそつだもんね。屋台とかはちょっと汚くて、私も苦手。いいよ、きちんとした店に行こうよ。そっちの方が、春人さんにも勉強になるだろうしね。」

「屋台には屋台の味があつて、俺はけつこう好きなんだけどね。さて、荷物ほどいたら、ご飯でも食べに行こうか。」

「そうね。でも、ちよつと疲れちゃつたから。一眠りしていいかな？」

枕に顔をうづめながら、かすみは上田づかいで春人を見た。

春人は、スーツケースを開ける手を止めて、小さくため息をついた。

「いいよ。じゃあ、俺はせつかくだから、ホテルの中でもうひつりしていくるかな？」

「ごめんね。やっぱり飛行機が辛かつたみたい・・・せつかく来たのに、ごめんね。」

春人は、汗だくなつていていたTシャツを脱ぎ、新しいTシャツを着て用意をすると、かすみの横に座つた。

「なんも、気にしなくていいよ。んじや、少しうつくりしなさい。」

「ありがと。春人さん、好き。」

目を閉じたかすみのおでこに春人は軽くキスをすると、立ち上がりドアを開けた。

本当を言つと、腹が減つてしまつたので、近くのコンビニででも行こうかと思っていたのだった。

ホテルのエレベーターを降り、エントランスを抜けると、ムアツとした熱気が頬をさす。

ホテルの横はチャオプラヤ川が流れしており、ちょうど太陽が川の向こうに消えようとしていた。

川辺を散歩すると、観光客向けだらうか、屋台が立ち並んでいた。その中で、揚げ餃子の屋台があった。据えたような匂い、タイならではの匂いであった。

あの時も、こりゃって揚げ餃子を食べた気がする。

「だーかーらー、タイに来たのになんだってレストランでご飯を食べなきやならないのよ！ローカルフードを食べてこそその研究でしょ？旅行でしょ？観光客向けの味なら、日本でも食べれるわよー。」

「せっかく着いたんだから、さっせと出かけましょー。ホテルの中なんて、寝るときだけでいいのよ。経験、体験、その積み重ねこそ旅行の意義でしょ？」

「まずつ、この餃子、くさい！でも、これがタイ人にはおいしいって感じるのよね？それなら、タイ人の味覚は根本的に日本人とは違うのよ。だから、春人も同じよ。日本人に合うイタリアンを作らなきゃならないってことね。」

揚げ餃子を買って、一口に入れた。

「・・・せっぱままずいよ。なあ、幸？」

誰にも聞かれないその一言は、太陽と一緒にチャオプラヤ川に溶けて行つた。

朝焼けは霧の中から始まる。

タイの高層ホテルのビル群を春人は見上げた。

上方は霞にかかるついて、見えない。

それは、タイという地域の特色なのだろうか。

タイの交通渋滞は世界最悪と言われている。貧民層と富裕層が混沌と入り混じる町。ピカピカのベンツも、荷台にたくさんの人を乗せたトラックも、みな同じように道路に並ぶ。

何百万台という車から吐き出されるスモッグのせいで、空がくもっているのか。春人にはわからなかつたが、間違いなく言えるのは気持ちのいいものでないということだった。

春人とかすみがタイに来て、もう2日目である。

初日の夜は、ホテルの近くのタイ料理屋に行き、ほろ酔いのままホテルへ。

春人は夕食を食べながら、

「エキゾチックな夜にしようね」と笑つて話すと、かすみは「バカ」といつて顔をそむけるのだった。

恋人として付き合いを続けている以上、体の関係はもちろらんあるの

だが、イマイチしつくつこないというのが春人の想いだった。

人間の体にもいろいろな種類があって、合うものと合わないものがある。それは努力とか想いだけではどうにもならないんだろうな、というのが春人の考え方である。

それでも、タイの夜は濃密に更けていったのだが。

ホテルのビュッフェを食べながら、春人は話し始める。

「今日はどういう予定なんだっけ？ツアー、申し込んでるんだよね？」

かすみは、タイまで来たというのにヨーロピアンスタイルに決め込んでいる。クロワッサンにコーヒー。歐米か！と突っ込みたくなった。

「うん、春人さんに任せてもよかつたんだけど、私は海外初めてだつたから、申し込んでしまったんだ。ごめんね」

上目づかいで春人の目をのぞきこんでくる。かすみは、この顔が得意のようだ。

「いや、この前に来た時は、食べ歩きで観光らしい観光をしなかつたからちよつといいよ。で、どんなところにいくんだい？」

「えーとね、エメラルド寺院つて有名なところとか、暁の塔つて有名なところ。知ってる？」

「うーん、聞いたことあるような、ないような」

「さんざんガイドブックを見せたじゃない」

「ふーっと頬を膨らませながらかすみはぼやいた。

「じゃあ、寝つ転がってる仏さまの寺院は知ってるよね?」

「あ、それならわかるよ。大丈夫」

「そういう寺院は、帽子とか靴を取らなきゃならないから、気をつけてね」

「OK!」

平和な会話が続いた。ふと、春人は窓の外に目をやる。桟橋に船が止まり、現地の人間がぞろぞろとあふれて出てくる。

そういうものを見ていると、ああ、異国之地に来たんだな、と春人は思うのだった。

そして、昔の恋人を探している自分にも気付くのだった。見つけることなんて、出来るわけもないのに。

「春人さん、乗りたいの?」

「え? 何に?」

「いや、船をずっと眺めているからさ。乗りたいのかな~って」

視線を変えずに、春人は言う。

「うん。前の時も乗ったんだ。夕日が沈むころ。川がオレンジに染まるのを見て、感動したのを覚えてる、きれいだったんだよね」

ぱあっと、顔を輝かせてかすみは答える。

「すうーーー。そういうの見てみたいなー。ねえ、ガイドさんにお願いしてみようね。なんか、ロマンチックじゃない？」

春人は、純粹な年上の女性を見つめ、「ああ」とか「うん」とか気のない返事をするのだった。

「見て、春人！夕日がきれいだよ。川も人もビルも、みんなオレンジ色！何か一色に染まるのって、素敵よね。一日のうち、一瞬だけみんな同じになるの。それって、その一瞬だからきれいに見えるんだろうね。人もそうかもね。一瞬だけわかり合える、一つになれる、みたいな。・・・いや、エッチなこといつてるんじゃないって！」

オレンジ色の笑顔は、かすみには持っていないものだった。

その影を求めて、今回のタイ旅行を受けたのかもしれない。その影を、振り払うために今回の旅行はあるのかもしない。

春人は、振り切るように船から田を離し、かすみと同じクロワッサンを取りに席を立つのだった。

そして、その日の午後、そのオレンジ色の笑顔をもう一度見ることになるとは、春人には全く想像できるわけもなかつた。

世間は広いようで、狭いのだ。

ルンピニ・ナイトバザール

大きな公園の横にある、タイにいくつあるバザールの中の一つである。

ここは、その中でも夕暮れになると人がどこからともなく集まり、夜になると活気があふれる。

大きなビアガーデンもついており、観光客にはもちろん、地元の人間にも活用されている。

売っているものと言えば、観光客向けのおみやげはもちろん（最近ではD&Gやディーゼルの偽物が多い。一昔前はエイプが主流だったが）、洋服、化粧品、アロマオイル、靴やカバン、そして、インテリア用品である。

春人とかすみは昼間に市内観光を終え、夕暮れとともにこのナイトバザールにやってきたのだった。

「うわあ～、すごい人！どこから見ていいかわからないね。楽しみ！」

かすみはキヨロキヨロしながら、はしゃいでいる。

現地ツアースタッフのハルさんがライトバンから声をかけた。

「バンゴハンはここでどうぞ、ビールもある。ここは、パッタイ、

「おいしい。」

「パッタイ？」

春人は汗を手に持っていたタオルでぬぐいながら聞き返した。夜になつたといえど、タイの気温は下がらない。

「日本の焼きそば、みたいなもの。おいしい。ビール、パッタイ、これ最高」

ハルさんは、20代後半の現地のタイ人だった。日本に言語留学を1年しておる。太いまゆげがトレードマークのいい男だった。

「ハルさん、いつ迎えにきてくれるの？」

もうすっかり打ち解けた春人が聞く。

「後、2時間後ね。僕も、ご飯食べてくる。ビールも飲んじゃおつかな？」

二ツと白い歯を見せて、ハルさんは笑った。本当に仕事中でもお酒を飲みそうだから怖い。

「いいんじゃない。酒飲んでるみたいなテンションだしさ。」

春人も笑いながら答えた。

ハルさんと別れ、春人とかすみは、ビールを片手にバザーに繰り出した。

春人は、自分用のTシャツ、ショーズ、お土産用のチョコレートなどを買い、かすみは化粧品などを買い、お互に満足することとなつた。

「春人さん、なんかこの先の区画は、アートやインテリアのものを置いてるみたい。お店におけるようなもの買って行つたら、オーナーに喜んでもらえんじゃない？」

春人は、市内のイタリアンレストランに勤務している。店の名前は「チエルヴィーチュ」、イタリア語で「うなじ」の意味である。オーナーの趣味なのか、フュチなのかは、春人には未だ聞けず仕舞であつた。

「そうかもね、何かオリエンタルな壁掛けとかなら、意外とマッチするかもしねーね」

「でしょ？行つてみましょ。よ。」

かすみは春人の手を引く。

その店は、その区画の中になつた。

ナイトバザールは、基本的に屋外にある屋台なのだがその店は壁があり、他の店とは一線を画していた。

扉を開けると、ヒヤッとした空気が春人の頬を触れた。エアコンがしつかり聞いているようだ。

店内には、様々なインテリア用品が置いてあった。日本にもよくある、インテリア雑貨屋さんという感じであろうか。

驚いたのは、その値段である。イメージズのショーアーはレプリカなのだろうか。日本で買う3分の1ほどの値段で置いてある。

かすみは年頃の女性があるので、インテリアにも興味がある。田を輝かせながら、店内を物色していく。

春人は、そんな中、壁掛けの絵を見つけた。

真っ黒の背景に浮かびあがる、大輪のひまわり。写真のようなリアルさがある。

その絵を見て、春人は動けなくなつた。なんだか、体の中に電気が走つたようである。

どうしてこの絵が気になつたのかはわからないが、春人は茫然とその絵を見つめていた。

「春人さん、この絵が気に入つたの？ひまわり？」

かすみが後ろから声をかける。

「素敵な絵ね。これ。私もこいつの好きだな。」

春人は答えずに、絵を見つめている。

「これ、お店にいいんじやない？これ、買いましょうよ。ねえ春人さん。・・・ねえ？」

「ん、ああ。そうだね。なんだか、すごい俺もこれに惹かれたんだ

よね。なんでだろ？なんかすごいグッとくるんだ。」

「いらっしゃるんだろう？お店の人、いないのかな？サワディーカップ」

片言のタイ語で、かすみは控えめに声を出した。奥の扉から、一人の女性が出てくる。

「はーい、あら日本人の方ですか？」

中からは、同じ日本人の女性が出てきた。

その姿を見たとき、春人は理解した。なぜ、この絵に惹かれたのか。

このひまわりは、この女性に似ていたんだ。

「いらっしゃいませーー」

その女性は、春人を見て、一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに何事もなかつたかのような顔をした。肩までのショートボブの茶色の髪を揺らし、笑顔で言った。

春人は、茫然として先ほどまで絵を見つめていた代わりに女性を見つめていた。

その顔を忘れる訳がない。2年前のあの日、空港の改札の向こうに消えていったあの笑顔だった。

女性と目が合つた。

「幸・・・」

春人は声をもらした。

「あ、この絵ですね～？」これ、私が描いたんですよ。なかなかうまくできたと思つて。」

女性は、笑顔で話しかけてきた。春人の言葉を書き消すようにな。

「あ～、お客様たちはハネムーンですか？幸せそうでいいですね～？」

「いやいや、違いますよ～。でも、一人で来る初めての海外旅行なんですよ。ね、春人さん？」

かすみは、店員が日本人だつたようで、安心した様子だつた。ハネムーンという言葉にまんざらでもない様子だつた。

「ああ、うん。そなんだ。」

幸は春人に目を合わせずに言つた。

「そ～なんですか～、うらやましいですね。私も、2年前にこっちに引っ越してきてから、彼氏なんていませんもん。」

「あら、2年前にタイに？どうしてタイに引っ越されたんですか？」

かすみは現地で、日本人に興味津々だつた。

「もともと私は、日本のインテリアショップで働いていたんですけど

ど、」ひちで買付とかして働かないかって話があつたんですよ。ところで、お客様たちは、日本のどこから？」

「札幌なんです。」

春は「これ見よがしに驚いたように答える。

「札幌なんですか？！私も札幌に住んでいたんですよ。今ならなら寒い時期ですよね～」

「あつ、北海道弁だ。すうい、こんな偶然つてあるんですね？ね、春人さん。あれ、春人さんどうかした？」

春人が何も言わないのに気づいたかすみは言った。

「いや、なんにも。こんな偶然つてあるんだね。ところで、タイに引っ越ししてから大変じゃなかつたですか？」

春人は、なるべく平然を装いながら言った。

「大変でしたよ。食べ物は全然違うし、言葉は通じないし。日本語少し通じる人がスタッフにいたから、その人を頼りながらなんかやつてきました。」

「すういなあ。私なら絶対独りで外国に住むなんて、できないです。不安じやなかつたですか？」

「めちゃくちゃ不安でしたよ。本当はね、一緒についてきてほしい人もいたんですけど、振られちゃつて・・・つて、なんだつてこんな話してるんでしょうね？」

からからと笑いながら幸は話をやめない。春人が何かを話す暇を与えようとしているようだ。

「この絵の値段でしたよね。えっと・・・これくらいでいいですか？」

店の電卓を見せながら幸は言った。破格の値段である。

かすみは驚きながら言った。

「そんな値段でいいんですか？日本でなら、絶対そんな値段じゃ買えない！」

「同じ道産子に出会えたってことですね。オマケです。でも、他のスタッフに言つたらダメですよ。」

幸は、絵を壁から外し、丁寧に梱包し始めた。

春人は、その一挙一動を見ていた。もう2度と見ることができないと思っていた幸が目の前にいる。

幸も気づいていないはずがない。でも、女人人と一緒に来ている春人のことを気遣っているのは、明らかだつた。春人も、その気持ちを無駄にすることはできなかつた。

それは、2年前のことを責めているようにも春人には感じるのであつた。

かすみは、レジでお金を払い、絵を受け取つた。

「ありがとうございます。いやー、こんなに安くて嬉しいな。またタイに来る」ということがあつたら、ぜひきますね！」

「札幌にも、いちの商品を扱つてる店ありますよ。ＨＰもありますから、見てみてください。これ、名詞にＨＰのアドレスあるんで。」

と、言いながら名刺を差し出してきた。春人も名刺を受取る。

名刺には、日本語で、「青山幸」という名前が書かれていた。

「あれ？日本語ですか？」

かすみが気付いて言つた。

「もうなんです。もうすぐ日本に帰る」と思つていて、少しでも日本人とネットワークを作ろうと思つていてるんです。だから、日本人のお客さんにはいつもやつて渡してるんですよ。友達になつてくださいね。」

オレンジ色の笑顔で言つながら、幸は手を差し出してきた。

「あはは、じゃあ、日本に戻つてきましたぜひ。」

社交辞令を言つながら、かすみは差し出された手を握り返す。

「ボーランドのあなたもよろしくね。」

幸は少し、含みを持たせた目を春人に向け、手を差し出してきた。

春人は、恐る恐る手を伸ばす。

「さつきの話ですけど」

春人は、からからに乾いたのどを振り絞るように言った。

「2年前の別れた人が、もう一度やり直したいって言つて言つてきたらどうします？」

春人は幸から目をそらさずに言った。かすみは、不思議そうに見ているが構わなかつた。

幸は、手をぎゅっと力を込めながら握つて言った。

「どうでしょうね？私には、わからないです。やり直すかもしけない。」

ニッコリと笑つて、幸は言つた。

「ありがとうございました。サワディーカップ」

もうすっかり発音の良くなつたタイ語で言いながら、幸は挨拶をして、奥に消えていった。

春人とかすみは店内に出た。

ムアッとした熱気が春人には、息苦しかつた。

「ねえ、春人さん。私ならね、たぶん2年前の別れた人が現れたら、まだ新しい彼氏がてきてなかつたらついていつちゃうと思うな。」

かすみは、春人の腕を取りながら言った。

「でも、なんであんな質問したの？」

不思議そうに言つ。

春人は答えた。

「なんで・・・なんだろうね？」

ナイトバザールは、どんどん人が増え活気が増していく。

春人には、この喧騒がありがたかった。ぐちゃぐちゃの心のまま、
がやがやしたビヤガーデンに向かい、ビールを呷りたかったのだ。

「いやー、タイ楽しみだね。本場の味はやっぱり酸っぱいのかな?」

ホットパンツからスラリと伸びる足がまぶしい。

ニヤニヤしてしまつのを悟られないように、春人は幸から田線を外した。

話は2年前にさかのぼる、春人は今のイタリアンレストランに勤め始めた初めの年、幸と一緒にタイに向かっていた。

成田空港から飛び立つた飛行機の中、幸はもうタイに向けた格好をしていた。

ホットパンツに小さめのTシャツ、薄手のカーディガンを着ている。

小さめな体だが、細い体には健康的な色気があった。

「でも、飛行機って肩こるね、映画も飽きたし、お酒も飽きた。早く着かないかな?」

うーん、と上に背伸びをすると、小さめのTシャツからへそがチラリと見える。春人は人知れずドキドキした。付き合つて3年、まだまだときめきを忘れたことはない。

「おいおい、へそ見えてるつてー!」

「いいじゃん、減るもんじゃないしー!あー、それって独占欲じゃな

いの？」

「なつ、馬鹿、違うって！」

「絶対そうだよ。私は春人のものじゃないよ。春人専用ではあるけど、他の人は見るだけ。大丈夫、大丈夫」

からからと笑つて幸は言うのだった。春人は、苦笑いを返す。付き合いは深まつても、ペースは幸が作るのだった。

タイに着いてから、二人は夢のような時間を過ごした。

「うわー、すごいね、タイの屋台つて。安いから、とりあえずフードファイトと参りますか」

と言いながら手を取つて、幸は走り出した。

「まずはネームピン、焼き鳥みたいなもんかな？もつちゅいしつかりあつためてほしいよね」

幸は自分がほおばり、そのあとに春人の口にも運んでくれる。

「自分で食べれるつて。串を人に向けるな、危ないよ」

「私のような、美人に食べさせてもらえる幸せをかみしめなさい」

食べ終わった串を幸は、自分のカバンにポイッと入れた。幸は絶対にポイ捨てはしない。

「次はここね。これは・・・マンゴー?かな?」

身振り手振りをしながら、幸は屋台で料理を調達し続ける。

「タレもくれたよ。これについて食べるのかな？」

「やううだと思うよ。青い身をしてるけど、確かにマンゴーの匂いがする」

「さすがはイタリアンシェフ、頼りになります。あつ、タレはなんかみたらし団子みたいな味がする。おもしろいね~」

屋台をめぐる春人は、タイ料理と一緒に幸せをかみしめていた。

フリーで屋台を回ったり、酒を飲んだりしながらあつという間にタイ旅行は最終日。

春人は、ホテルの荷造りをしていた。男の自分はスーツケース一つ。女の幸は、大きめの「ディパック」が一つ。

幸は化粧つ気がないので、女性のそういうものが少ないのはわかるが、あまりにも荷物が少ないと春人は不思議に思っていた。おみやげなどを買っていた様子もない。

「ねえ、幸、どうしてこんなに荷物が少ないので？職場のみんなの ominagaeha?」

シャワーを浴びて、バスタオルを巻いただけの幸に春人は声をかけた。

少し、間を空けながら幸が答える。

「んー、買つてないよ。いらぬとかいつてたから買わなかつた。つてか、後ろ向いてて着替えるから、エツチ」

春人は後ろを向けさせられ、シユルシユルと着替える音に少し興奮しながら続けた。

「いらないっていつても、普通は買うもんだよ。そういうのは、社交辞令つてやつさ」

「私は嘘を言う人が嫌いなの。いらないって言つたから買わなかつた。それでいいじゃん」

「ま、間違つてはいないけど・・・」

「「」の話は「」れでおしまい」

と言つて、幸はなんだか悲しげな顔をした。

幸は自分の意見を曲げない。間違つてることも少ないのだが。

端的に、的を得てている。そのくせ、人には押し付けようとはしない。

春人にはまぶしく映る魅力だつた。春人は優しすぎて、相手に合わせてしまつところがあるのを自分でも知つていた。

ホテルを出て、空港に向かうバスの途中。幸は、無言だつた。珍しく。

春人はウトウトしていた。

「ねえ、春人。私、嘘ついたやつたの」

「……ん？嘘？」

目をこすりながら春人は聞き返す。幸は窓の外を見ている。

「そう、嘘。おみやげの話」

「ああ、職場の人があらないうつて言つたつて話だつけ」

「そう。職場の人ね、いらないうつて言つてないの。欲しいうつて言つたんだ」

「じゃあ、買つていけばいいでしょ。空港でも買えるよ。めんどくさかつたの？」

「そうじやなくてね。そうじや……ないんだけど……」

「どうしたの？幸らしくもない。なんかあつた？」

「おみやげ、みんなにあげる」とができないんだ」

春人は、尋常じやない雰囲気を感じ取った。

何かが始まる予感がする。

別れ話？なんにも悪いといふなんてなかつたのに？春人の心拍数が跳ね上がつたようだ。

胃のあたりが痛い。絶対普通じゃない。

「あのね。私、日本に帰らないの」

窓の外を見ながら、幸は言つ。

「え？ 日本に帰らない？ …… それどうこいつ」と？」

春人は、言葉の衝撃を受け止めきれなかつた。

「ビザ取つたの。このまま、タイに住むの。会社から異動辞令がきて。タイで買い付けの仕事やれつてさ。ひどいよね、うら若き乙女に海外派遣だよ」

「ちよ、ちよつと待つてよ。タイにこれから住むつてことへ」

「そうなの。部屋も取つてあるし、荷物も全部送つてある

だから荷物が少なかつたのか。春人は納得した。

でも、納得できないことの方が多いつた。

「じゃあ、日本に帰らないってこと？え？ 僕はどうしたらいい？」

「・・・一人で帰つて」

幸は、まだ窓の外を見ている。表情は見えない。

「私は遠距離恋愛なんて続かない。続ける気もない。私はタイにいる。あなたは札幌でがんばつて」

「ちょ、ちょっと・・・〔冗談だろ?」

幸は窓の外を見て答えない。

「そんな大事なこと、黙つてこの旅を続けてたつてことかよ」

春人は、必死になつて続ける。

「もしかして、始めからこの旅行自体そのために・・・」

春人の頭は真っ白になつた。

「そんなのーそんなのってあるかよー」

春人は思わず声を荒げた。バスの他の乗客が何事かと、振り返つた。

構わずに続ける。

「そんなの独りで決めて、独りで勝手に結論出すなよーおかしいよ
！」

幸は黙つて窓の外を見ている。

「でも、決めたことだから。私はタイに残る」

「だから勝手に決めるなつて！」

焦つて春人は続ける。なんとか考え方直してほしい。

「おいつ！幸、俺達は付き合って3年だろ！その3年間があつて、この終わり方かよ。そんなのつてないんじゃないか？」

しかし、声を荒げて反発しながらもビートが納得するとこもあった。

幸もわかつてないわけじゃない。

いろんなことを考えて出した結果がこの形だったと。

ここまで追い込んだ状態じゃなきゃ、別れられない。それは幸が一番感じることだと。

まだ、窓の外を見ながら幸は言つ。

「好きって感情だけじゃどうしようもならないのよ。私の人生での夢もある。私は自分のインテリア・ショップを持つのが夢、それにはこの異動は蹴るわけにはいかなかつたのよ。あなたも自分の店を持つ夢がある」

幸は続ける

「あなたのことが好き。でも、お互いの道は一緒ににならなかつた。それだけよ」

理論的には間違つていない。人生といつ道が一緒になる人もいれば、一緒ににならない人もいる。

幸の声は震えていた。肩も震えていた。

春人は何も言えなくなつた。

バスは空港に向かう。

幸は、それから春人と田を合わせようとはしなかった。

春人にはどうしたらしいかわからなかつた。話が急すぎてまとめる
ことができない。

自分の夢を捨てて、幸を追いかける。

「俺もタイに残る」

そう言えば幸は喜んで、「ウン」というだらう。春人が幸を好きな
ように、幸も春人のことが好きなのもわかっている。

好きだから、こりこり形でしか別れることができなかつたのだ。

わかつてはいる。わかつては、いる。

バスは空港につき、田を合わせようとした幸が荷物を運び、搭乗
手続きを済ましてしまう。

何かを振り切るよう。

「はい、チケット。改札は向こうつね。忘れ物しないでよ」

田が合つた。

幸は、唇をギュッとくみしめながら、耐えている。自分が選んだ道
だから、絶対に泣かないと決めているかのように。

春人は、泣いている。止められない。

「じゃあ、私はここまで」

幸が足を止める。

「私は夢をとった。春人はどうするの？」

幸は、春人をまっすぐ見つめて言う。

「春人の夢を、私にくれる？」

幸の目から涙がこぼれた。感情がこぼれたようだった。

泣きながら言う。

「後、1分で決めて。じゃないと、私があなたを追いかけちゃう」

泣きながら言う。

「私は、春人が好きなの。好きで好きで、好きで好きでしようがないの。でも、だめなの。だめなの。二人の恋なのに、私が全部決めて。わがまま身勝手だつてわかつて。恨まれてもしょうがないの」

泣きながら言う。

「こんなこと言える資格はないけど」

泣きながら言ひ。

「ありがとう」

春人は、動くことができなかつた。

「5」

雑踏の中に、響きわたる声。

「4」

立ちすくむ身体。

「3」

のどの中がヒリヒリする。乾いて、ねばついて、言いたい一言がない。

「2」

まっすぐと見つめるその眼には、不思議な力がある。

「1」

田を離すこともできずに、ゆっくりと動く口元だけを見つめていた。

「0、タイムオーバー」

それが、最後の記憶となつた。

幸は、体を翻し、迷いのない足取りで雑踏の中に消えていった。

春人は、幸が見えなくなつてもそこに立ち去っていた。

2年前の、一つの別れだった。

そしてまたこのタイでの出会いがあった。

それを、人は「再会」と呼ぶのだった。

春人と幸が2年ぶりの再会を果たした次の日、春人と幸は水上マーケットに顔を出していた。

川べりに暮らしている人間にとつて、川は道路であり、道である。バスのエンジンを元に作ったスクリューがついてある船は、陸地で言う車、現地のタイ人達はうまいもので、すいすいお互に避け合ひながら、運転している。

そうした船に乗り、お目当ての水上マーケットを目指すのだった。船着き場より、水上マーケットのある場所までは時間にして30分ほどの短い距離の船旅になるはずだったが、年末といふこともあり船着き場は長蛇の列。

春人と幸、ガイドのハルさんはもう船旅の時間をとつに過ぎ去るくらい並んでいた。

「ごめんねー、春人、かすみ。いつもほこなんじゃないの。もつと人、少ない」

ハルさんは、しかめつらして言った。

「何にもいいのよ。それにしてもいろんな人がいるのね。日本人だけじゃなく、欧米人も多いみたい」

「タイは、今、乾期ですよ。乾期は雨少ない。雨少ないと、旅行樂しい」

「だから観光客が多いのね。ま、私たちもそうだけど」

かすみは、汗をぬぐいながら言った。タイは年中通して暑い。乾期であるこの時期は、カラッとした暑さで過ごしやすいとはいっても、直射日光の元小一時間も外に立っているのは辛い。

もともと、かすみはそんなにタフな方ではないので、顔つきは少しひつたりしている。

「大丈夫？ 水、いるかい？」

春人が声をかける。幸と再会し思つことは山のようにあるが、顔に出来さないよう春人は努めてかすみに優しく振舞つていた。

「大丈夫。ちょっと、暑さが辛いけど・・・」

かすみは、少し無理な笑顔を見せている。

「ゴメンナサイネ。もう少しで順番が来るので、がんばってー」

ハルさんが、申し訳なさそうに言う。確かに、もうすぐ春人達の順番が回つてくるようだった。

船には船頭が一人、乗客を乗せると船が出発し、出発の際に船着き場の係から金を受け取る。船頭は一度も船から降りずに、バトンパスのような形でお金を受け取るのだ。乗客は最大でも5人くらいまで。小さな船が何度も何度も道路くらいの幅の川を往復するのだ。

「やつと、順番来たね。んじゃ、春人さん、かすみさん、乗りこみ

ましょう

ハルさんが手を取り、一人ずつ乗せてくれる。幸いなことに、春人とかすみは先頭だった。

バルバルバル…安っぽい音を立てながら、船のスクリューが回りだす。

レバー一つで右回り、左回りと変わり、逆回りにするとバックもできるという。面白いもんだ、と春人は思った。

レバー一つで、前後が変わる。生き方なんかも、所詮そんなものなのかもしない。会社の指示でレバーを切り替えた幸のことを、レバーを切り替えれなかつた春人は思つた。

船が動きだし、心地よい風を体全体に受ける。

「気持ちいいー！最高ね！春人さん」

かすみが周りをきょろきょろしながら言った。川べりには、現地のタイ人の住まい、野生のココナツツ林、また観光客向けの蛇の描かれた看板などがあつた。

ハルさんが、エンジン音に負けないよう、大声で叫ぶ。

「あの看板は、コブラショーン。蛇のショーン。みたい人、けっこうたくさんいる」

そんなハルさんの声も、春人の心には届かなかつた。

春人は昨日会つた幸のことを思つていた。

隣のかすみは笑顔で、風を受けている。心とは裏腹に春人は、かわいい人だと思った。

そんな春人に気づいたかすみが大声で言つ。

「どうしたのー！なにかついてるー？」

はにかんだ笑顔を向ける。何も疑つていない目、優しい瞳。春人は、なんだか心が痛み、目をそむけた。

「なんでもないよー」

そっぽを向きながら、大声で返すと、「ならいんだけビー」と返してくる。にっこり笑いながら。

春人の心の中にはモヤモヤとした黒い雲ができていた。

別段、何も悪いことをしているわけでもない。2年も前に別れた女に再会はしたもの、一瞬だけだ。確かに、2年前に旅行に来たとは隠しているが、そんのは別に言わなくてもいいことだと春人も思う。

もともと、春人はこの旅行で幸との思い出を振り切ろうと思つていた。今まで、どこか胸の奥に刺さつていて刺を、苦々しい思い出をかすみと共に抜こうと。

しかし、何の因果か幸と出会ってしまった。その棘は、皮肉にもより深く、突き刺さってしまったのだ。

もう2度と会えないと思っていた。そうやって振り切らうとした。

それが、田の前にもう一度、手の届くところに現れる。

あの時、伸ばせなかつた手を、今、伸ばすことができるのだ。

春人は、風を受けながら考える。自分が何を求めているのか。

そんなことを思いながら風を受けていると、船は速度を落とす。水上マーケットに着いたのだ。

「なんだか風を受けたら、元気になっちゃつた。それで、楽しみましょう!」

新しい船着き場に着き、3人は船を降りた。

川の両側には、歩けるよう道ができていて、川に浮かんだ船の上ではドリアンなどの果物、バミーなどの麺料理といった食べ物から、Tシャツや人形、タイ舞踊に使つお面などおみやげがどつたり売つている。

かすみは、電卓を片手に値段交渉を始める準備も万端だつた。

「2時間後、ここに集合ねー。ちゃんと飯も食べてきてくださいねー」

ハルさんが言うと、かすみは春人の手を取つて歩き出した。

かすみの手は、暖かかつた。その暖かさが春人には辛かつた。

かすみは鏡の前でくるつと回った。ひらりとワンピースのすそが翻る。

「ねえ、春人さん、こんな感じで大丈夫かな? ドレスコードのある店つて初めてで…」

不安そうな、顔を見せながらかすみは言った。

「大丈夫だと思うよ。ガイドブックにも、そんなに厳しくないって書いてあるし」

そういう春人は、シャツに袖を通しながら言った。暑いタイ旅行に一枚だけ持つてきた、一張羅のグッチのボタンダウンシャツだった。ループタイを通すと、シンプルながらもしっかりと存在感を見せる。

かすみは、ノースリーブの花柄のワンピースに、薄いカーディガンを羽織っている。長い髪を下ろし、胸元にはバカラのネックレスが光っている。

二人は夕食に、64階建ての高層ビルの屋上にあるレストランに向かつた。

タイのトップクラスの料理も味わった方がいいということで、ガイドのハルさんに予約してもらっていたのだ。

エレベーターの前に行くと、スタッフが行き先を聞いてくる。

春人は、イタリアに一人旅をしたこともあり、簡単な英語なら話すことができた。エレベーターにすると、かすみが小声で言つた。

「なんだかドキドキするね」

「そうだね、タイ料理の最高峰か・・・存分に学んで帰らなきゃ」

少し真剣な顔つきをすると、かすみはにっこりしていた。

エレベーターがつき、廊下を進むと一つのドアがあつた。

「welcome！」

そういうと、スタッフが扉を開ける。そこは、空だつた。

64階から見下ろすバンコクの街並み。それは、一人の初めて見るものだつた。

「ふああ・・・すごい」

目を大きく見開いたかすみが感嘆の声を漏らした。

扉のすぐ下には、レストランに通じる階段があり、その先には大きなバー・カウンターといくつかのテーブル席がある。逆側には、大きなステージがあり、黒人のシンガーがジャズの音色を歌つていた。

現地の人間はほとんどいない。欧米人が多い中、二人はテーブルに通された。

「すごいね、周りの人たちなんだかみんなっこよく見える。映画の中に入ったみたい」

かすみはうつとりして言った。かすみの後ろには、地上にも空にも星を散りばめたようにキラキラしていた。

メニューを見て、春人はイベリコ豚、かすみは鴨をメインでオーダーし、シャンパンを頼んだ。

すぐに二つのシャンパングラスが運ばれてきて、グラスの中もキラキラと輝いた。

グラスを持ち上げながら、春人は言つ。

「何に乾杯しようか？」

「…うーんとね」

かすみは考え込んでしまった。その表情に陰りがあるのを、春人は気付かなかつたのだが。

そして、春人はしびれを切らして言った。

「二人のタイ旅行に乾杯しようよ」

「いや・・・ごめん。ちょっと待つて」

かすみはこだわっているようだ。

「うん、やっぱりこれかな。変わらぬ想いに乾杯しましょ」

かすみはしっかりと春人の目を見て言った。

「あなたを愛する変わらぬ想いに、春人さんは？」

春人は詰まってしまう。それでも、言わなくてはならない。心の葛藤を押しやり、都合のいい言葉を出した。

「変わらぬ想いに」

チンッ。乾いた音がタイの夜空に響き渡った。

「・・・私に対する想いならいいのに」

かすみはつぶやく。春人の耳には届かなかく、首をかしげた。

「ううん、なんでもない。料理楽しみだね！」

かすみは、夜景に目を移した。

料理はどれも素晴らしい。タイ料理というよりは、創作料理だった。ただ、味付けはやはりタイ風でナンプラーなどが使われていたが。

「おいしかった！最高だね！」

シャンパンから、キールに変えたかすみが言つ。お酒に弱いかすみが2杯も飲みほすなんて、春人にはびっくりしていた。

「ちょっと酔つ払つてない？めずらしげね、2杯も飲めるなんて」

「こんなシチュエーションで飲まないのはもったいないよ。ちょっと酔いたい気分でもあつたし」

「そりなの？」

「うん」

会話が止まった。がやがやした周りの喧騒の中で、ピンと空気が張り詰める。

「春人さん、嘘ついてる」

「へっ？」

春人は完全に虚をつかれた。かすみが何かに感ずいているなんて、露ほどにも思つていなかつたのだ。

「春人さん、嘘ついてるでしょ？ 幸さんだけ？ あの人、会つたことがあるはず。気付かないとも思つた？」

かすみは、酔いに任せて吐き出した。にやりと笑つて続ける。

「気付いたよ。女の勘つて鋭いのよ」

春人は、少し放心ていたが、慌てて言った。

「いや、あれは昔の友人で、今更言つともないと思つて…」

その先が続かない。かすみは、まっすぐと春人の目を見ている。

「…いや、変に話しても仕方ないか。ごめん。確かに幸は知ってるし、昔の彼女だったんだ」

「ふうん」

「あの時はびっくりしたけど、でも、今は何もないよ」

「ふうん」

かすみはキールを飲み干した。空になつたグラスをそつとテーブルに戻すと、そつと言つた。

「私はね、春人さん。あなたが好きなの。たぶん、あなたが私を好きじゃなくても、私は好きであり続けると思う」

かすみの目には、涙が浮かんでいる。かすみは、うつむきながら続けた。

「それだけはわかつてね」

ポタポタと落ちる涙を見せないようにしているかすみを見て、春人は素敵な女性だと心底思った。

それでも、幸という棘が抜けないのが、春人には悔しかつた。

そして、最終日の夜は更けていき、日本に帰る朝を迎える。

朝を迎える。

日本までの飛行機は7時間半。朝一番の便の飛行機のため、ホテルのチェックアウトは6時。その間にハルさんがロビーで待つて手はずだった。

春人とかすみは、昨日の夜のことがあったにも関わらず、いつもと変わらないように接していた。何かを隠すように。そして、触れてしまうと何かが溢れてしまうかのように。

「おはようございます。タイの最後の朝です。心残りはないですか？」

ハルさんは、今までと変わらずに笑顔を見せた。

「ありがとうございます、ハルさん。あなたのおかげで、この旅もすっごい楽しいものになつたよ」

ハルさんは荷物をバスに詰め込みながら言った。

「二人、仲のいいカップルだつたからがんばった。私も、付き合っている人、いる。でも、ケンカ多い」

「えー、ハルさんの彼女つてどういう人なの？」

「恥ずかしいから教えない。でも、きれいな人よ。いつか、日本に旅行に行くときには連れて行く

「じゃあ、ぜひ札幌に来てよ。ハルさんみたいにうまくできないけど、私がハルさんのガイドになるからね」

「じゃあ、その時はお願ひするね。じゃあ、バス、出発するね。空港まで1時間、早いから寝ていいよ」

「なんだか、寂しいなあ・・・タイともお別れかあ・・・」

かすみはハルさんとひつきりなしに話し続けた。春人はその横で眠ろうとした。もちろん、眠ることはできなかつたのだが。

「じゃあ、私はここまで。私も楽しかつたよ」

バスは空港に着き、ハルさんが荷物を降ろしながら行つた。搭乗手続きも済んでいるので、後は改札に向かうだけになつた春人とかすみを残し、ハルさんを乗せたバスはまだ朝もやの翳る道路の向こうに消えていった。

無言で荷物を二人は運んだ。改札に向かう途中で、春人は足を止めた。

そこは、2年前のあの場所だつた。幸が立ち止まつた場所。かすみは、何も言わず改札に向かう。春人の足が止まつたのはわかつていた。何も言わないのではない、言えなかつたのだ。

5歩ほど、かすみは歩き、足を止めた。振り返る前に、春人が言つた。

「・・・」めん

春人の胸のうちももう決まっていた。自分の気持ちを整理する旅の中で「ことになるとは、誰が想像できただろうか。

「ごめん。俺、行かなくちゃ。行かなくちゃだめなんだ」

振り返ったかすみは、目に涙を浮かべながら堅く唇を噛んでいる。決して泣かないと決心しているかのように。

「かすみのこと、好きなんだ。でも、行かなくちゃならない。ここで行かなくちゃ、俺はずっとここから飛び立てないんだ」

空調の効いた空港の中、一人の周りの空気だけより一層温度が下がったようだ。人ごみの音が、遠ざかる。

春人はステッカースの上に置いてあつた絵を見た。透明なビニールでくるまれたひまわりは、優しく微笑んでいた。

「2年前、あの人は・・・」

「いいの。何も言わなくて」

春人の話すのをささぎるようにかすみは言った。

「いいの。言わなくて。気付いてたけど、気付かないフリをしていたの。でも、こんなに急な話になるとは思ってはいなかつたけど」

「ごめん」

「春人と付き合ってから、春人の心の中に私の届かない場

所があるのは知つてたの。でも、それがあの人なんてね・・・こんなに広いタイつて国の中で、どうして会わなきやならなかつたのかしらね」

かすみは続ける。

「私があの店に入らなきや、今頃幸せな気分で飛行機に向かつてたんだね。悔しいな・・・でも、もう春人さんの気持ちは決まっちゃつたんでしょ。わかつたわ。飛行機には私独りで乗るね」

春人はかすみの顔をじつと見つめていた。何も言える訳がない。自分勝手なわがままで、一人の人生を狂わせようとしているのだから。初めての海外旅行で恋人に逃げられるなんて、とてつもないトラウマになるはずだった。

「幸さんだっけ？芯の強い人だよね。一人でタイに来て・・・きれいな人だつたね」

「うん、強い人だよ。俺なんか全然かなわないくらい」

「でも、春人は追いつこうとしてる。あの人に真正面から。私にはそんな強さないから。ここで、春人の手を引っ張ることすらできないの・・・」

かすみは、下を向いた。床にポタポタとシミができた。春人は見ないふりをした。

「いつてらつしやい。私は私のできることをする」

かすみは大粒の涙をこぼしながら笑顔を見せた。優しく、もうく、け

どひつそり確かに咲いている一本のかすみ草のようだ。

「私は、あなたが好き。好きでい続けるから」

笑顔で手を振るかすみの目を春人は見た。涙で濡れているその目には、強さがあった。

春人は心中で数えだす。

5、4、3、2、1、そこまで数えたところで、ぐるりときびすを返し、歩き出した。

あの日の幸のように、迷いのない足取りで。そして、春人はもう振り返らなかつた。

キキーッとタクシーが止まる。交通事情の悪いタイのタクシーはストップ＆ゴーを繰り返す。エコドライブとは正反対だ。

扉が開くなり、春人は駆け出した。

スーツケースを店の前で放り出し、ひまわりの絵だけ持つて店の中に入る。

キヨロキヨロとあたりを見回すが、幸の姿は見えない。

店内には、タイ人の店員が一人。幸いなことに英語が通じたので、幸がどこにいるか聞く。店の裏で、絵を描いていると言われ、春人は走り出した。

どうなるかなんてわからない。ただのひとりよがりの行動なのかも
しない。それでも、春人には動くしかなかった。

店の裏には、公園があり、暑い日差しを浴びながら幸が絵を描いて
いるのが見えた。今度は、公園の中の大輪のバラの花だった。

「幸つ！」

春人は大声を出した。幸が振り向く。そして、大きく目を見開いた。

「春人？どうして？」

春人は幸の前で止まり、肩でゼイゼイと息をした。のどはからから
で、声が出ない。でも、今回はなんとしても言わなきやならなかつ
たのだ。

「幸・・・俺・・・全て、ぶんなげてきたよ。全部、ぜーんぶ」

幸は何も言わない。春人が続ける。

「2年かかったけど、やっと追いついた。幸に手を伸ばせるとこ
にまで来たんだ」

春人は、幸を見た。あの時と同じようにまっすぐに田を逸らさずによ。

幸の口が動く。

「5」

幸の目は笑つてゐるようだつた。

「4」

春人の目からは涙があふれていた。あのとき、止まつていていた時間は今動き出したのだ。

「3」

春人の体が動く。

「2」

春人は、幸の小さな華奢な体を抱きしめた。

「1」

そして、続きが言えないようにキスをしたのだった。長い長いキスを。

タンッとキーを叩いて、俺は大きく一度伸びをした。キーボードを叩くのはまだまだ慣れなかつたが、少しずつ文章を打ち込むのも早くなつていた。

コンコンとノックの音が聞こえた。ドアが開き、声をかけられた。

「また、パソコンなんかいじつて。明日の仕込み早いんでしょう？も

う寝たら?」

「わかつてゐよ。だからもう寝るよ。それより、聞いてくれよ、完成したんだ!」

「本当に結局どうひつて終わらせたの? 実際のままじゃないんでしょ?」

「ほんな感じ。読む?」

声をかけて、俺は椅子から降りた。部屋を出て、コーヒーを入れなおすことにした。料理人足るもの、しっかりとコーヒーにも気を遣いたいところだけど、家の中くらいはインスタントで充分だ。

お湯を沸かし、コーヒーを2つ入れる。一つはブラック、もう一つには角砂糖を2個入れた。

カップを持って部屋に戻ると、声をかけられた。

「ほんな風になる訳ないよ! 2年も待たせてたんでしょう? すぐに抱き合つなんてね~」

「変かな? ドラマチックに終わらせたつもりだったんだけどな

「もうちょっとリアリティがあつたほうがいいかもね。でも、空港のシーンはやっぱリアルだね」

「そりでしょ。合格点?」

「うん、なかなか。待つ強さってわからない人って多いんだよね。

待つていうのも、一つの行動なの、次から次へと動くことがいいことみたいに見られるでしょ？恋愛って、それだけが全てじゃないのよね」

「そうだね」

「さて、明日からまた仕事が始まるんだから早く寝ない？」

「もうちょっと起きてるよ。ハガキ、全員に書いてないんだ。先に寝ていいからね」

「ん～、じゃあ、式のアルバムでも見ながらベッドにいるね。結婚しましたハガキは、私はみんな書いたから、明日からはゆっくつするんだ～」

「いい」身分だと。家の」とは任せたよ

「了解。あんまり遊びすぎちゃダメよ」

俺は、軽くキスをするとパソコンに向かった。

そして、部屋で一人になつてから、机の中から一通のハガキを取り出した。満面の笑顔の一人が書いた結婚しましたハガキだった。

ただ、ちょっと他のと違つのはHメールだつてこと。

これは、内緒にしなきゃならない。見つかったら、事件になつてしまつ。

宛名書きは終わってるから、あとはメッセージだけだ。なんて書こ

う？

少しだけ悩んでから、俺は「ありがとう」とボールペンで書いた。でも、想いなおして、ありがと書いた場所をグリグリと塗りつぶし、代わりに書いた。

「ざまあみろ」

完全な負け惜しみだけど、まあ良しとしよう。あの時、ガツンと言われたから、今の幸せがあるんだから。

エアメールを机に戻し、ふと後ろを見る。

壁にかかっているひまわりとバラの絵が、少し笑った気がした。

「タイムオーバーって2年前に言つたでしょ？無理よ。いまさら。でも、もがいて悩んで行動した後だから見えてくることってあるんじゃない？待つてくれる人がいるんでしょ？大事にしてあげなさい。ってかね、私には恋人がいるの、タイ人で日本人向けのガイドをしてるんだけどね・・・」

最終話（後書き）

お仕事ごめんなさいがどうぞごめんなさいました。

ぜひ、ご感想をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324o/>

始まりの終わりの始まり

2010年11月18日02時57分発行